

3.11東日本大震災 早期復興は ～あれから10年～

過去の教訓が大きく生きた

大事。工業用水も重要なラインラインであり、一刻も早く企業へ水を送ることが求められました。そこで本復旧までの応急的な対応として浄水場の緊急連絡管を活用しました。震災からわずか4日後の3月15日に、鹿島浄水場からコンビナートへ最低限の振替配水を行うことができ、企業の命をつなぐ手助けができたと思います。

須藤「緊急連絡管によるバックアップ体制が確立されていたことが生きました。また、震災以前から渡邊局長の指示の下、管路の老朽化対策をスピード感を持って進めていました。これがなければ震災時により大きな被害が生じていた可能性があります。鹿島浄水場と鰐川浄水場以外にも、水海道浄水場と関城浄水場、潤沼川浄水場と水戸浄水場など、浄水場の緊急連絡管を活用することで振替送水を行いました。」

須藤「私は春の人事異動に伴い、5月から県企業局次長を拝命しました。応急復旧は完了していたので、本復旧を迅速に進めるのが私の大きな仕事でした。鰐川浄水場の本復旧工事では地元建設業者が大いに活躍してくれました。地元を良く知る事業者であるから」

追し、11の浄水場が計画停電の対象となり、再度通電してもきれいな水はすぐに出ません。工業用水が止まることで企業は大きなダメージを受け、取り返しのつかない事態になってしまいます。幸いにも県を挙げて節電に努めることで大規模な計画停電は免れましたが、企業局としても独自の節電対策に努めました。需要ピーク時間の電力を削減し、さらに水戸浄水場に設置した大規模太陽光発電設備の効果に合わせて最大25%の削減を達成しました。」

須藤「水戸浄水場の太陽光設備は震災直後からいち早く整備に着手し、電力消費量の大きい夏場の供用に間に合うように急ピッチで事業を進めました。」

企業局と公社が一体で対応



た。その甲斐あって7月14日から本格稼働することができました。」

■災害復旧には膨大な費用が生じたと思えます

須藤「震災における水道施設の被害は甚大でしたので、あらゆる機会に国に対して財政支援を要望しました。通常の補助率は2分の1または3分の1ですが、東日本大震災では10分の8から10分の9という高い補助率であったため、財政負担を軽減できました。多忙を極める中、現場写真の撮影や、被災状況を伝える資料を職員が製作してくれたお陰で現場の状況を国に十分説明できました。」

■東日本大震災は多くの教訓をもたらしたと思えます。水道事業の未来のため、現在進んでいる事業や制度などについてお聞かせください

須藤「震災を契機に、事業間連絡管を整備する必要性が明らかになりました。」

渡邊「企業局では震災以前から災害を想定した物資の備蓄や緊急連絡管の整備などを進めておりました。いざ震災が起きた時、先人の仕事が生かされ、これからの備えが多くの命を救いました。また私自身も桜川市の漏水事故の教訓を生かして資材の備蓄や災害時協力員制度の創設などを行いました。」

これが、震災時の応急復旧に大いに役に立ちました。何より、昼夜を問わず復旧に尽力してくださった建設業者の皆さまの献身には本当に頭が下がります。本当にありがとうございました。冒険にも触れましたが、大きな地震はいつまたやって来るかは分かりませんが、災害が起きた時、迅速に対応するために行政と建設業者がしっかりと信頼関係を築くことが何より大切だと思います。」

東日本大震災における各浄水場の被災（漏水等）工事状況
(2011年3月20日8時現在)

事務所	浄水場	工事状況（上水）	工事状況（工水）
県南水道事務所	霞ヶ浦浄水場	漏水復旧工事16箇所 浄水場機械設備1箇所	
	利根川浄水場	漏水復旧工事9箇所	
	阿見浄水場	漏水復旧工事4箇所	漏水復旧工事5箇所 場内配管復旧工事1箇所 舗装復旧工事一式
鹿行水道事務所	鹿島浄水場	漏水復旧工事11箇所 添架管復旧工事1箇所	漏水復旧工事14箇所
	鰐川浄水場	浄水場復旧工事一式 漏水復旧工事1箇所	浄水場復旧工事一式 漏水復旧工事1箇所
県西水道事務所	関城浄水場	漏水復旧工事4箇所 水管橋支承修繕工事1箇所 浄水場電気計装修繕工事2箇所	漏水復旧工事1箇所
	新治浄水場		漏水復旧工事1箇所
	水海道浄水場		漏水復旧工事1箇所
中央水道事務所	水戸浄水場	漏水復旧工事11箇所 那珂川水管橋修繕工事1箇所 沈沙池流出管復旧工事等2箇所	
	潤沼川浄水場	漏水復旧工事3箇所 場内配管復旧工事2箇所 水位計修繕工事1箇所	
	那珂川浄水場		漏水復旧工事11箇所 沈沙池補修工事1箇所



元茨城県企業局次長
須藤 賢一 氏



元茨城県企業局技監兼
県南水道事務所長
塚田 正男 氏



元茨城県企業公社業務課長
長澤 俊一 氏

～あれから10年～ 復興への歩み

記者の目

いつでもどこでも、蛇口をひねれば当たり前においしく安全な水が手に入る。日本の水道は本当に偉大だ。だからこそ「水が出ない」という非常時の動揺は大きい。当たり前が当たり前ではなくなる恐怖は、筆舌に尽くしがたいものがある。

そのような非常事態であったが渡邊氏は「決して現場は右往左往していなかった」と当時を振り返った。現場が落ち着いた理由。それは事前の危機管理の賜物であり、長年に渡り建設業界と信頼関係を築いてきた結果なのだろう。未曾有の災害の中でも冷静に復興に尽力した当時の指揮官の方々に、県民のひとりとして改めて感謝したい。

そして、今ある日常は行政と多くの企業の目に見えぬ影の努力があればこそ成し遂げたもの。あれから10年、風化させないために私も心の中にしっかりと残していきたい。